

## 巻頭言

編集長から巻頭言を書くよう依頼を受け、自分がそのような歳になったことを改めて自覚した。しかし、不惑はとっくに過ぎたが、いまだ未来を見通せず、日々迷ってばかりである。学生の頃に恩師から「外挿はいつも危険だ。この変化の激しい世の中で、未来を予測するのは難しい。特に、君のような能力の低い人は、2〜3年先が限界だろう」と言われた言葉を今でも鮮明に覚えている。当時は抵抗心を持って聞いていたが、今ではそれを認めざるを得ない。

私は現在、系外惑星の大気の研究に専念しているが、それを始めたのは約10年前のことである。2013年秋に石垣島で開催された日本惑星科学会秋季講演会で、当時の若手研究者や学生たちを集めて、始めたばかりの系外惑星大気研究の講演で1セッションを占領させてもらった。いま思えば、お祭りのようなノリだった。やる気だけはあったものの、これから何をどうすれば良いのか見えていなかった。当時ぼんやりと想像していた未来と現在の状況は全く異なっている、良い意味で。

10年前と比べて系外惑星の発見数は5倍以上も増え、また、2021年末にジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡(JWST)が打ち上げられ、赤外分光観測によって系外惑星大気の特徴が次々に明らかになってきている。残念ながらJWSTに日本は参加できなかったが、嬉しいことに、初期成果の報告論文に日本人の若手研究者がしっかりと関わり、多くのプロポーザルに貢献している。さらに、日本が主導または参加する系外惑星ミッションがいくつも予定されている(Ariel, Roman, JASMINE, WSO-UV, LAPYUTA)。私がCo-PIを務めるESAのArielでは、博士を取得して数年の若手研究者がミッション内でサイエンスワーキンググループをリードするなど大活躍している。

昔は、この歳になると自分が大家になり、若い人に偉そうに教える姿を想像していたが、現実はその逆だ。急速に進展する分野で、若い人たちに教えられる毎日である。しかし、こういう状況は分野として極めて健全であり、未来が明るいことは間違いない。

生駒 大洋(国立天文台)